

たじみん昼話 73

良い人間関係を築く良い距離感覚

人は、様々な人間関係の中で生活しているという本質は、古来から変わっていない。歴史上の出来事も、この関係性の濃淡の結果であり、良いか悪いかは別として世界の様相に彩を与えている。

よく学校生活が社会の縮図と言われるのは、人間形成を図るために行っている学習や生徒会活動、ボランティア活動、保健厚生活動等が、必要条件である生徒と教員の各々の関係性を基に成立しているからである。

そして、この社会の縮図で学ぶべき重要項目でありその構築が困難なものの1つが、人間関係における精神的・物理的な距離感覚である。

作家の北杜夫は、極端な恋愛の在り方を描いた2つの恋愛小説を通して、人間関係における距離感覚の調整の困難さと重要性を示し、その解決のヒントを示唆している。

北が、距離がありすぎる側の例として示した作品が、ジードの狭き門に出てくる男女の関係だ。女性側の度が過ぎる無関心が作り出した距離が、双方を不幸にするという話だ。一方、距離がなさ過ぎる側の例として示した作品が、ある男性に好かれた真正直な女性が、あまりに美化されたことに恐れをなして最悪の道を選択してしまうというフランソワ・モーリャックの作品だ。距離感覚に無知な男が、彼女を美化（結晶化という）しすぎた事が物語の発端だが、小説の最後にある一文は、主人公の男とその距離感覚を見事に皮肉っている。大半の読者が、作者の意図を読み違えていると思うので、是非読んで自分なりの解釈をして考察してくれたまえ。

これにより、良好な人間関係を構築する適度な距離感覚の調整方法に関するヒントが得られるだろう。しかし、距離感覚は人の数だけ存在するため、これを計算する公式は存在しない。読書などで知識を吸収したら様々な距離を試して、帰納的にこの距離感覚を求めることを忘れないで欲しい。

どうしたら人間関係が上手くいくのかという悩みは、大小の差こそあれ老若男女を問わない万人の悩みだ。今友人関係で悩んでいる人は、「恐らく、相手も同じ悩みを持っている」ということを忘れないで、上記のことを実行してみよう。